

活用即接中辞交代論

多和田眞一郎

Infix Changing as Conjugation

TAWATA, Sin'icirou

Even though there are different opinions about the treatment of auxilliary verbs and particles with relation to affixes in the Japanese Language, there are many that do not recognize “infixing” when prefixes and suffixes are considered.

With Modern Okinawan as an example, the possibility of switching conjugation by “infixing” is displayed. This rationale is able to seek the extent of the application of the conciseness of the morpheme as a part.

I will give a small example. In the following, kam-u-ta-'N (one was eating (giving reason)), kam-agi'j-u-'N (one is about to eat), kad-o'ok-a'N-ta-'N (one did not eat beforehand) it can be said that -u-, -ta-, -agi'j-, -o'ok-, -a'N- act as “infixes”, the switch being namely in the conjugation.

0. はじめに

日本語の接辞に関しては、「助動詞」「助詞」をどの程度その対象とするかで異論はあるものの、「接頭辞」「接尾辞」を考え、「接中（挿入）辞」を認めないのが大勢である。

ここに、それに異を唱えようとするものである。（現代）沖縄語を例に、その「活用」を「接中辞」の交代で捉えることも可能であることを示そうと思う。その合理性は、部品たる「形態素」の簡潔さとその応用の広さに求めることができる。

1. 接中辞容認の理由

「接尾辞」とすると無駄な道具を用意することとなる。

kamuta'N (食べるのであった、食べた)

kado'ota'N (食べていた)

kade'eta'N (食べてあった)

kado'ocuta'N (食べておくのであった)

で考えてみる。

kam-uta'N kad-o'ota'N
 kad-e'eta'N kad-o'ocuta'N

のように「接尾する」とした場合「-u-」「-N-」といっしょになった「ta」、「-e'e-」「-N-」といっしょになった「ta」、「-o'ocu-」「-N-」といっしょになった「ta」をそれぞれ考えなければならない。それぞれがひとつになった（セットになった）「ブロック」を用意しなければならない。

これに対して、kam--N という「わく」を考え、間に入れておけばよいとした場合、
 -u-, -o'o-, -e'e-, -o'ocu-, -ta-

という簡単な（単純な、扱いやすい）「ブロック」を用意すればよい。

「-ta-」「ブロック」は4個要るが、「-uta'N」「-o'ota'N」「-e'eta'N」「-o'ocuta'N」の4個よりずっと簡単である。ただし、この例では

-uta'N, -o'ota'N, -e'eta'N, -o'ocuta'N の4個に対し、

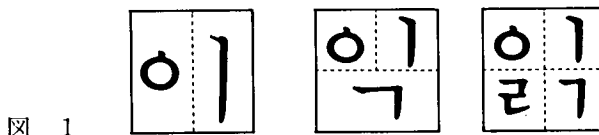
-u-, -o'o-, -e'e-, -o'ocu- それぞれ1個、計4個。-ta- 4個。総計8個と2倍の数の「ブロック」が必要となり、無駄なように見えるが、それぞれ他に応用（転用）の効く「ブロック」であって、-uta'N, -o'ota'N などのようにそれ以外には使えないものではない。他との関係を考えて、このような単純な「ブロック」のほうが使用しやすい。広汎な使用に耐えうる。

-taru, -takutu, -tasiga, -sata'N などと広げていけばすぐわかることである。この4つの例もこのままでは、それぞれ（それだけの）4つの「ブロック」を別に作らなければならない煩雑さを招来する。

わかりやすくするために、「ハングル」とその文字構成法を例に説明する。

ハングルには母音字10個と子音字24個が用意されている⁽²¹⁾。だからといって、同じ大きさの文字だけを作り、それらを単純に組みあわせて（並べて）いけば「印刷」ができるわけではない。「同じ文字」を含むいくつかの「ブロック」を用意しなければならない「文字構成」となっている（不合理この上ない！）。

たとえば母音字「ㅏ」で考えてみる。「一音節」を同じ（大きさの）「ㅏㅏ」に入れるとすると 이 ㅏㅏ で大きさの違う「ㅏ」を用意しなければならない。2分の1のそれ、3分の1のそれ、4分の1のそれとそれぞれ違う「ㅏ」を用意しなければならない（図1参照）。同じ大きさのもの一種類だけを用意しておき 이 이ㅏ 이ㅏㅏ などとするわけにはいかないのである（周知のように、そういう試みがなされたことがあるが、すぐに破綻した）。つまりは、文字の組合せ可能数だけの「ブロック」を用意しなければならない。実際には使用されない組合せもあるからそれを差し引いて考えなければならないが、それにしてもその数たるや！



これに対して、アルファベットは単純であり、簡単である。たとえば、air, bill, cider, millet などに含まれる「i」は同じ（大きさの、規格の）「i」でよい（1/3のi、1/4のi、1/5のi、1/6のiなどというのは不要）。（今、発音、音節数などは考慮の外においている。）26個の「ブロック」だけでいろいろな「構造物」が作れるのである。

前出 kamuta'N 以下の例を二つの方式で書いてみると次のようになる。

kamuta'N

kamuta'N

kado'ota'N

kado'ota'N

kade'eta'N

kade'eta'N

kado'ocuta'N

kado'ocuta'N

図 2

図 3

図 3 の方式に拠ろうというのであるが、これは、たとえば、最大五つの「ます」があるとして、その仕切は穏やかで、前の「ます」が「空」の時は、後の「ます」が前へ寄っていき、「かたまり」を作る。

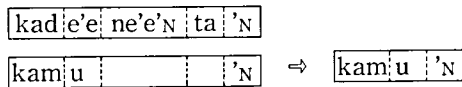


図 4

2. 「ブロック」の結合の仕方

「形態音素」的処理を受けた「ブロック」がどのような結合を示すか。これをまず先に考えることにする。前出の /kam-/ /kad-/ を例にして説明する。

/-m-/ の連結用凹凸、 /-d-/ の連結用凹凸が用意されており（ついており）、それぞれの連結用凹凸に合う位置に、「接中」する「ブロック」の連結凹凸がある。図 5、6、7 参照。

kam-

-u-

kam-

-o'o-

{kam-}

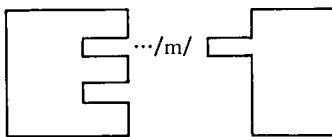


図 5

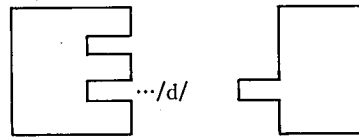


図 6

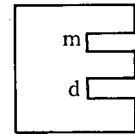


図 7

「ブロック」には（右方に）凹だけをもつもの^(註2)、凹凸両方をもつもの、（左方に）凸だけをもつものがあることになる^(註2)。いくつかの例を示せば図 8 のようになろう。

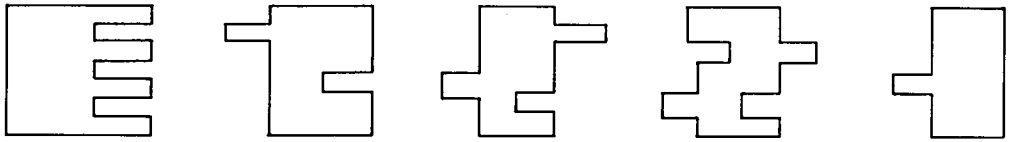


図 8

全ての「ブロック」に、あらゆる時に対応できる凹凸が付いていると考えるか、場合に応じてしか適応できないようになっていていると考えるか。順序の制約がはたらくから後者のほうが妥当ということになる。

3. 「わく」の設定

「接中」するためには、その「わく」となるべき前後の端（「初端」「終端」）が設定されていなければならない。これについて考える。

前出の *kamu'N* をひとつの手がかりとして作業を進めてみる。前述のことで明らかなように「u」を「接中辞」と捉えることができるのであれば、その前後が「わく」ということになり、変異を追究すれば「わく」が浮かびあがってくるのが予想される。代表例として次の十（1.～10.）の形をとりあげ、これとの対応をかぎとして「わく」を求めていくことにしよう。

(1) 言い切りの形。「断止形」と呼ぼう。

1. *kamu'N* (食べる)
2. *kama'N* (食べない)
3. *kada'N* (食べた)
4. *kama'nta'N* (食べなかった、食べないのであった)
5. *kamuta'N* (食べるのであった)
6. *kama'nta'N* (食べないのであった、食べなかった)
7. *kado'o'N* (食べている)
8. *kado'one'e'N^(#3)* (食べていない)
9. *kado'ota'N* (食べていた)
10. *kado'one'e'nta'N* (食べていなかった)

(2) 名詞の前に来る形。「連体形」と呼ぼう。

1. *kamuru~* (食べる～)
2. *kama'N~* (食べない～)

3. kataru~ (食べた~)
4. kama'ntaru~ (食べなかった~、食べないのであった~)
5. kamutaru~ (食べるのであった~)
6. kama'ntaru~ (食べないのであった~、食べなかった~)
7. kado'oru~ (食べている~)
8. kado'one'e'n~ (食べていない~)
9. kado'otaru~ (食べていた~)
10. kado'one'e'ntaru~ (食べていなかった~)

(3) 条件の意を表す形。「条件形」^(註4)と呼ぼう。

1. kamura'a (食べるのなら)
2. kama'nra'a (食べないのなら)
3. kadara'a (食べたのなら)
4. kama'ntara'a (食べなかったのなら、食べないのであったのなら)
5. kumutara'a (食べるのであったのなら)
6. kama'ntara'a (食べないのであったのなら、食べなかったのなら)
7. kado'ora'a (食べているのなら)
8. kado'one'e'nra'a (食べていないのなら)
9. kado'otara'a (食べていたのなら)
10. kado'one'e'ntara'a (食べていなかったのなら)

(4) 逆接の意を表す形。「逆接形」と呼ぼう。

1. kamusiga (食べるが)
2. kama'nsiga (食べないが)
3. kadasiga (食べたが)
4. kama'ntasiga (食べなかったが、食べないのであったが)
5. kamutasiga (食べるのであったが)
6. kama'ntasiga (食べないのであったが、食べなかったが)
7. kado'osiga (食べているが)
8. kado'one'e'nsiga (食べていないが)
9. kado'otasiga (食べていたが)
10. kado'one'e'ntasiga (食べていなかったが)

(5) 原因・理由の意を表す形。「因由形」と呼ぼう。

1. kamukutu (食べるから)
2. kama'Nkutu (食べないから)
3. kadakutu (食べたから)
4. kama'ntakutu (食べなかったから、食べないのであったから)
5. kamutakutu (食べるのであったから)
6. kama'ntakutu (食べないのであったから、食べなかったから)
7. kado'okutu (食べているから)
8. kado'one'e'Nkutu (食べていないから)
9. kado'otakutu (食べていたから)
10. kado'one'e'ntakutu (食べていなかったから)

(6) 「～し」の意を表す形。「接続形」と呼ぼう。

1. kamu'i (食べるし)
2. kama'N?a'i (食べないし)
3. kada'i (食べたし、食べたたり)
4. kama'nta'i(食べなかったし、食べないのであったし、食べなかったり、食べないのであったり)
5. kamuta'i (食べるのであったし)
6. kama'nta'i(食べないのであったし、食べなかったし、食べないのであったり、食べなかったり)
7. kado'o'i (食べているし)
8. kado'one'e'N?a'i (食べていないし)
9. kado'ota'i (食べていたし)
10. kado'one'e'nta'i (食べていなかったし)

(7) 疑問詞 ta'a (誰)、nu'u (何)、ziru (どれ)、?i ci (いつ)、ma'a (どこ)、nu'u'nci (どうして、なぜ)、ca'a (どう、どのように) とともに現れる疑問の形。「疑問形1」と呼ぼう。

1. kamuga (食べるか)
2. kama'nga (食べないか)
3. kadaga (食べたか)
4. kama'ntaga (食べなかったか、食べないのであったか)
5. kamutaga (食べるのであったか)

6. kama'ntaga (食べないのであったか、食べなかったか)
7. kado'oga (食べているか)
8. kado'one'e'nga (食べていないか)
9. kado'otaga (食べていたか)
10. kado'one'e'ntaga (食べていなかったか)

(8) 「～こと、～もの」の意を表す形。「体言形」と呼ぼう。

1. kamusi (食べるもの)
2. kama'nsi (食べないもの)
3. kadasi (食べたもの)
4. kama'ntasi (食べなかったもの、食べないのであったもの)
5. kamutasi (食べるのであったもの)
6. kama'ntasi (食べないのであったもの、食べなかったもの)
7. kado'osi (食べているもの)
8. kado'one'e'nsi (食べていないもの)
9. kado'otasi (食べていたもの)
10. kado'one'e'ntasi (食べていなかったもの)

ここで中間的整理をしておく。

「ブロック」を「接頭辞」「接中辞」「接尾辞」(あるいは「先頭辞」「中間辞」「終結辞」)に分類すると以下ようになる。

接頭辞 kam-, kad-

接中辞 -u-, -a'n-, -ne'e'n-, -a-, -ta--

接尾辞 -'n, -ru, -ra'a(re'e), -siga, -kutu, -'i, -ga, -si

いま「わく」を求めているのであるから、当面、接頭辞と接尾辞に注目すればよい。接頭辞は(「食べる」に関しては)kam-, kad- 以外には存しないようなので、接尾辞に焦点を合わせればよいということになる。

いままで見てきた「接尾辞」は「異形態」が存せず、扱いやすかったが、以下に見るものは、音韻交代規則で処理されるべき要素を含んでいる。

(9) 「はい、いいえ」の答えを要請する疑問の形。「疑問形2」と呼ぼう。

1. kamumi (食べるか)
2. kamani (食べないか)

3. kadi'i (食べたか)
4. kama'nti'i (食べなかったか、食べないのであったか)
5. kamuti'i (食べるのであったか)
6. kama'nti'i (食べないのであったか、食べなかったか)
7. kado'omi (食べているか)
8. kado'one'eni (食べていないか)
9. kado'oti'i (食べていたか)
10. kado'one'e'nti'i (食べていなかったか)

「疑問形2」の接尾辞として-miを想定し、音韻交代が起こったとすれば説明が容易となる。

1. kam+u+mi → kamumi
2. kam+a'N+mi → kamani
3. kad+a+mi → kadi'i
4. kam+a'N+ta+mi → kama'nti'i
5. kam+ta+mi → kamuti'i
6. kam+a'N+ta+mi → kama'nti'i
7. kad+o'o+mi → kado'omi
8. kad+o'o+ne'e'N+mi → kado'one'eni
9. kad+o'o+ta+mi → kado'oti'i
10. kad+o'o+ne'e'N+ta+mi → kado'one'e'nti'i

つまり、 'N+mi → ni
a+mi → i'i

という音韻交代規則が存在するのである。(接尾辞のことを尽くしたわけではないが、次へいく。)

4. 接中辞の種類

前述(1)の「断止形」を例に考える。/kam/ と /kad/ とを「接頭辞」、「'N」を「接尾辞」と規定した。その間のものどもが「接中辞」であって、相互の関係から次のように分析できる。

1. kam-u-'N
2. kam-a'N (← kam-a'N-N)
3. kad-a-'N
4. kam-a'N-ta-'N
5. kam-u-ta-'N
6. kam-a'N-ta-'N

7. kad-o'o-'N

8. kad-o'o-ne'e'N (← kad-o'o-ne'e'N-'N)

9. kad-o'o-ta-'N

10. kad-o'o-ne'e'N-ta-'N

(2. 8. に関しては 'N+'N →'N なる音韻規則がはたらいっている。ついでに言えば、(2)「連体形」に関して 'N+ru →'N^(#5) という音韻規則が存する。)

以上から、u, a'N, ne'e'N, a, ta, o'o を「接中辞」と認定することができると思うが、他にどのようなものが存するか、そしてそれらの間の出現順はどうかなどについて考える必要がある。

「断止形」に限ってあげてみると、他に、以下のような形式が存在する。

kamabi'ju'N (kamabi'i'N) (食べます)

kamabira'N (食べません)

kamabita'N (食べました)

kamabira'nta'N (食べませんでした)

kamabi'juta'N (kamabi'ita'N) (食べるのでした)

kamabira'nta'N (食べないのでした)

'jumimise'e'N^(#6) (お読みになる)

'jumimiso'o'ju'N ('jumimiso'o'i'N) (お読みになる)

'jumimiso'ora'N (お読みにならない)

'jumimiso'oca'N (お読みになった)

'jumimiso'ora'nta'N (お読みにならなかった)

'jumimiso'o'juta'N ('jumimiso'o'ita'N) (お読みになるのであった)

'jumiso'ora'nta'N (お読みにならないのであった)

'jumimise'e'jabi'ju'N ('jumimise'e'ibi'i'N) (お読みになります)

'jumimise'e'jabira'N ('jumimise'e'ibira'N) (お読みになりません)

'jumimise'e'jabita'N ('jumimise'e'ibita'N) (お読みになりました)

'jumimise'e'jabira'nta'N ('jumimise'e'ibira'nta'N) (お読みになりませんでした)

kamu'usu'N (食べることができる)

kamu'usa'N (食べることができない)

kamu'usuta'N (食べることができた)

kamu'usa'nta'N (食べることができなかった)

kamu'usabi'ju'N (kamu'usabi'i'N) (食べることができます)

kamu'usabira'N (食べることができません)

kamu'usabita'N (食べることができました)

kamu'usabira'nta'N (食べることができませんでした)

kamu'usimise'e'N^(#7) (食べることがおできになる)

(中略)

kamu'usimiso'ora'nta'N^(#7) (食べることがおできにならなかった)

(中略)

kamibusa'N (食べたい)

kamibukune'e'N^(#8) (食べたくない)

kamibusata'N (食べたかった)

kamibukune'e'nta'N (食べたくなかった)

(中略)

kamibusa'jabi'ju'N (kamibusa'ibi'i'N) (食べたいです)

(中略)

kamizu'usa'N (食べすぎる)

(中略)

kamizu'usa'jabi'juta'N (kamizu'usa'ibi'ita'N) (食べすぎるのでした)

(中略)

kamagi'ju'N (kamagi'i'N) (食べはじめようとしている)

kamagira'N (食べはじめようとしていない)

kamagi'juta'N (kamagi'ita'N) (食べはじめようとしていた)

kamagira'nta'N (食べはじめようとしていなかった)

kamagi'jabi'ju'N (kamagi'ibi'i'N) (食べはじめようとしています)

kamagi'jabira'N (kamagi'ibira'N) (食べはじめようとしていません)

kamagi'jabita'N (kamagi'ibita'N) (食べはじめようとしていました)

kamagi'jabira'nta'N (kamagi'ibira'nta'N) (食べはじめようとしていませんでした)

kamagi'jabi'juta'N (kamagi'ibi'ita'N) (食べはじめようとしているのでした)

kamagi'jabira'nta'N (kamagi'ibira'nta'N) (食べはじめようとしていないのでした)

'jumagi('i)mise'e'N (読みはじめようとなさっている)

'jumagi'imiso'o'ju'N ('jumagimiso'o'i'N) (読みはじめようとなさる)

'jumagi('i)miso'ora'N (読みはじめようとなさらない)

'jumagi('i)miso'oca'N (読みはじめようとなさった)

'jumagi('i)miso'ora'nta'N (読みはじめようとなさらなかった)

'jumagi'imiso'o'juta'N ('jumagimiso'o'ita'N) (読みはじめようとなさるのだった)

'jumagi('i)miso'o'ra'nta'N (読みはじめようとなさらないのだった)

'jumagi'imise'e'jabi'ju'N ('jumagimise'e'ibi'i'N) (読みはじめようとなさっています)

'jumagi'imise'e'jabi'ra'N ('jumagimise'e'ibira'N) (読みはじめようとなさっていません)

'jumagi'imise'e'jabita'N ('jumagimise'e'ibita'N) (読みはじめようとなさっていました)

'jumagi'imise'e'jabira'nta'N ('jumagimise'e'ibira'nta'N) (読みはじめようとなさっていませんでした)

kamagi'ibusa'N (食べはじめようとしていたい)

kamagi'ibukune'e'N (食べはじめようとしていたくない)

kamagi'ibusata'N (食べはじめようとしていたかった)

kamagi'ibukune'e'nta'N (食べはじめようとしていたくなかった)

kamagi'ibusa'jabi'ju'N (kamagi'ibusa'ibi'i'N) (食べはじめようとしていたいです)

kamagi'ibukune'e'jabira'N (食べはじめようとしていたくありません)

kamagi'ibusa'abita'N (食べはじめようとしていたかったです)

kamagi'ibusa'jabita'N (食べはじめようとしていたかったです)

kamagi'ibukune'e'jabira'nta'N (食べはじめようとしていたくありませんでした)

kade'e'N (食べてある)

kade'ene'e'N (食べてない)

kade'eta'N (食べてあった)

kade'ene'e'nta'N (食べてなかった)

kade'e'jabi'ju'N (食べてあります)

kade'ene'e'jabira'N (食べてありません)

kade'e'jabita'N (食べてありました)

kade'ene'e'jabira'nta'N (食べてありませんでした)

(中略)

kado'o'ju'N (kado'o'i'N) (食べている)

kado'o'ra'N (食べていていない)

kado'o'juta'N (kado'o'ita'N) (食べていていた)

kado'o'ra'nta'N (食べていていなかった)

kado'o'jabi'ju'N (kado'o'ibi'i'N) (食べています)

kado'o'jabira'N (kado'o'ibira'N) (食べていません)

kado'o'jabita'N (kado'o'ibita'N) (食べていました)

kado'o'jabira'nta'N (kado'o'ibira'nta'N) (食べていませんでした)

kado'o'jabijuta'N (kado'o'ibi'ita'N) (食べているのでした)

kado'o'jabira'nta'N (kado'o'ibira'nta'N) (食べていないのでした)

'judo'o'imise'e'N (読んでいらっしやる)

(中略)

kado'o'cu'N (食べておく)

kado'o'ka'N (食べておかない)

kado'o'ca'N (食べておいた)

kado'o'ka'nta'N (食べておかなかった)

kado'o'cuta'N (食べておくのであった)

kado'o'ka'nta'N (食べておかないのであった)

kado'ocabi'ju'N (kado'ocabi'i'N) (食べておきます)

kado'o'cabira'N (食べておきません)

(中略)

kadaqcu'N (食べたりしている)

kadaqka'N (食べたりしていない)

kadaqca'N (食べたりしていた)

kadaqka'nta'N (食べたりしていなかった)

kadaqcuta'N (食べたりしていたのだ)

kadaqka'nta'N (食べたりしていなかったのだ)

kadaqcabi'ju'N (kadaqcabi'i'N) (食べたりしています)

kadaqcabira'N (食べたりしていません)

kadaqcabita'N (食べたりしていました)

kadaqcabira'nta'N (食べたりしていませんでした)

kadaqcabi'juta'N (kadaqcabi'ita'N) (食べたりしていたのでした)

kadaqcabira'nta'N (食べたりしていなかったのでした)

(中略)

kamasu'N (食べさす)

kamasa'N (食べささない)

kamaca'N (食べさした)

kamasa'nta'N (食べささなかった)

kamasuta'N (食べさすのであった)

kamasa'nta'N (食べささないのであった)

kamasabi'ju'N (食べさします)

kamasabira'N (食べさしません)

kamasabita'N (食べさしました)

kamasabira'nta'n (食べさしませんでした)

(中略)

kamasimise'e'n (食べさしなざる)

(中略)

kamasibusa'n (食べさしたい)

(中略)

kamasagi'ju'n (食べさそうとしている)

(中略)

kamaco'o'n (食べさしている)

(中略)

kamasimi'ju'n (食べさせる)

kamasimira'n (食べさせない)

(中略)

kamasimito'ocu'n (食べさせておく)

(中略)

kamari'ju'n (kamari'i'n) (食べられる)

kamarira'n, kamara'n (食べられない)

(kamarita'n) kamaqta'n (食べられた)

kamarira'nta'n, kamara'nta'n (食べられなかった)

(中略)

kamaqto'ota'n (食べられていた)

(中略)

kamari'jabi'ju'n (kamari'ibi'i'n) (食べられます)

(中略)

kamari'jabira'n'ta'n (食べられませんでした)

kamasari'ju'n (kamasari'i'n) (食べさされる)

kamasarira'n, kamasara'n (食べさされない)

(kamasarita'n) kamasaqta'n (食べさされた)

kamasara'nta'n (食べさされなかった)

(中略)

kamasaqto'ota'n (食べさされていた)

(中略)

kasimirari'ju'n (kasimirari'i'n) (食べさせられる)

kamasimirarira'N, kamasimirara'N (食べさせられない)

(中略)

kamasimiraqto'ota'N (食べさせられていた)

(中略)

kamasiri'jabi'ju'N (kamasari'ibi'i'N) (食べさせられます)

(中略)

kamasimirari'jabi'juta'N (kamasimirari'ibi'ita'N) (食べさせられるのです)

(下略)

以上を比べることによりその出現順が明らかになってくる。しかし、まだ処理すべき問題が残っているので、ここで整理をするのは早すぎる。

5. 形容詞

いままで対象を「動詞」に限定し、「形容詞」には触れなかった。問題が錯綜するのを防ぐためであった。ここで「形容詞」について考えることにする。

原則として、「形容詞」も「動詞」と同様の捉え方が可能である。「活用即接中辞交代」と考えることができる。「takasa'N (高い)」を例として若干の形式を見てみよう。

takasa'N (高い)

takaku ne'e'N (ne'era'N) (高くない)

takako'o ne'e'N (ne'era'N) (高くはない)

takasata'N (高かった)

takaku ne'e'nta'N (ne'era'nta'N) (高くなかった)

takako'o ne'e'nta'N (ne'era'nta'N) (高くはなかった)

takasa'jabi'ju'N (takasa'ibi'i'N) (高いです)

takaku ne'e'jabira'N (高くありません)

takako'o ne'e'jabira'N (高くはありません)

takasa'imise'e'N (takasamise'e'N) (高くていらっしやる) (お高い)

takasa'imiso'ora'N (高くていらっしやらない) (お高くない)

takasaru munu (高いもの)

takasaru qcu (高い人)

takaku na'ju'N (高くなる)

takaku nara'N (高くない)

takako'o nara'N (高くはない)

takasa'jabi'juta'N (takasa'ibi'ita'N) (高かったです)

takaku ne'e'jabira'nta'N (takaku ne'e'ibira'nta'N) (高くありませんでした)

takako'o ne'e'jabira'nta'N (takako'o ne'e'ibira'nta'N) (高くはありませんでした)

以上から次のように分析できることがわかる。代表例を示す。

taka-sa-'N

taka-sa-ta-'N

taka-sa-ru

taka-sa-'jabi'j-u-'N^(#9)

taka-ku ne'e'j-abir-a'N

「'N」「ru」が「接尾辞」と認定されたものであるから「sa」は「接中辞」となる。これは「ta」「abi'j」などとの関連からも明白である。(当然のように「taka」が「接頭辞」)

一考を要するのが「ku」である。結論を先に言えば、これは「接尾辞」とするのが妥当である。構文上「takaku」が独立性を有するからである。

takaku nasu'N. (高くなす。高くする)

takaku misi'ju'N. (高く見せる)

takaku ko'o'ju'N. (高く買う)

「takaku ne'e(ra)'N」もこれらに準じるものである。さらに、「takako'o ne'e(ra)'N」が、このことを強調する例となっている。

ちなみに、「takako'o」の「ko'o」は「takaku (高く)+ja' (は)」の「ku」と「'ja」とが音韻融合を起こしたものである。

そして図らずも、「ない ne'e(ra)'N」が動詞的であることを示す例とはなった。

ne'er+a'N, ne'e'j+abir+a'N

「ne'er, ne'e'j」が「接頭辞」であり、「接尾辞」「'N」との間に種々の「接中辞」が挿入されているのである。

6. 接中辞のまとめ

ここにきて「接中辞」のまとめができる。

以上(4. 5. で述べたこと)を比べることによりその出現順がはっきりしてくる。すなわち、次のようである。

一番目

as, ac; asimi'j, asimir, asimit

二番目

ari'j, arir, ar, arit, aqt

三番目

agi'j, agir, agit ; o'o ; o'o'j, o'or, o'ot ; e'e; o'oc, o'ok ; aqc, aqk

四番目

u'us ; ibu ; izu'u

五番目

sa

六番目

imise'e, imiso'o'j, imiso'or, imiso'oc

七番目

abi'j, abir, abit

八番目

u ; a'n, ne'e(ra)'n

九番目

a, ta

これまでの分析結果を次の表1のように整理すると、「接頭辞」「接中辞」「接尾辞」相互の連関が鮮明になると同時に「活用」即ち「接中辞交代」に他ならないことも首肯される。

接頭辞	接中辞									接尾辞
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
kam kad	as ac	ari'j arir ar arit aqt	agi'j	u'us	sa	imise'e	abi'j abir abit	u	a	'N ru
			agir	ibu		imiso'o'j		ta		
'jum 'jud	asimi'j asimir asimit		agit	izu'u	(注10)	imiso'or		a'n	te'e	ra'a re'e
			o'o			imiso'oc		ne'e'n ne'era'n	(注11)	siga
taka			o'o'j	i'ja'nz						katu
			o'or	i'ja'nd						
など			o'ot	i'ja'nt						'i ga si mi ku など
			e'e							
			o'oc	iguru						
			o'ok	i'jaq						
			aqc	igi						
			aqk							

表1

音韻変化規則

- | | |
|------------------|--|
| 1. 'N+'N → 'N | (例) (kama'N+'N → kama'N) |
| 2. 'N+ru → 'N | (kama'N+ru → kama'N) |
| 3. 'N+mi → ni | (kama'N+mi → kamani) |
| 4. a+mi → i'i | (kado'o+ta+mi → kado'oti'i, kad+a+mi → kadi'i) |
| 5. C+'i → Ci | (kad+'i → kadi) |
| 6. V+V → V'jV | (taka+sa+abi'j+u+'N → takasa'jabi'ju'N) |
| 7. 'ja+bi → 'ibi | (kamagi'jabi'ju'N → |
| 8. bi+'ju → bi'i | kamagi'ibi'i'N) |
| 9. ri+t → qt | (kamarita'N → kamaqta'N) |
| 10. ri+r → r | (kamarira'N → kamara'N) |
| 11. i+'wa → e'e | ('jum+i'wa → 'jume'e) |

(C = 子音、V = 母音)

表 2

7. 表示の仕方

伝統的方法に従えば /kam-, kad-/ (および /jum-, 'jud-/ など) は「語幹」と称され、「形態音素」的処理を受けて {kam} (および {jum} など) とでも表記されることになる。基本的考え方には異論はない。しかし、その表記法 (表示法) には一考を要するとの立場をとる。

形態音素設定は、抽象のしすぎである。その形態音素がどのようなものを代表しているかはすぐにはわからない。別にリストが用意されているとは言え、二段階になっていて不便である。そこで、一段具体に近づいた、次のような表示法を提案したい。

ka^m_d 'ju^m_d

図 9

前述の「ブロック」の喩えは、このような表示法を前提としたものであった。

これにならって、接中辞・接尾辞も以下のように表示できよう。

- ① a^s_c asimi^j_t
- ② ari^j_t (註12)
- ③ agi^j_t o'o o'o^j_t e'e o'o^k aq^k

④ u'u ibu izu'u i'ja'N^ā iguru
i'jaQ igi

⑤ sa

⑥ imis e'e^ā
o'o^ā

⑦ abi^ā

⑧ u a'N ne'e(ra)'N

⑨ ta te'e

接尾辞

'N ru r^{a'a} siga kutu 'i ga si mi ku
など

この表記法による例をいくつか示す。

ka ^ā+o'o+'N
(kad+o'o+'N → kado'o'N)

ka ^ā+a'N+ta+'N
(kam+a'N+ta+'N → kama'nta'N)

ka ^ā+o'o^ā+a'N+ta+ru
(kad+o'or+a'N+ta+ru → kado'ora'ntaru)

ka ^ā+agi^ā+ta+'N
(kam+agit+a+'N → kamagita'N)

ka ^ā+abi^ā+ta+'N
(kam+abit+a+'N → kamabita'N)

ka ^ā+ta+'N
(kam+a+'N → kada'N)

8. 接辞と助詞

従来「助詞」に含められていたものまで「接尾辞」と認定した (siga, kutu など)。しかし、だからと言ってこれが直ちに「助詞」を否定する立場にはならない。名詞の「曲用」をどのように捉えるかによって影響を受けるが、今、仮に次のように考えておく。

助詞＝自立性のあるものに付いて自立性を得るもの

hana (花) hana'ja (kana'a) (花は)

hanana'a (花か)

→ 'ja, na'a は助詞であるとする。

接辞＝自立性のないものに付いてともに自立性を得るもの。

kam-u-'N

→ kam, u, 'Nともに接辞。その結合した kamu'N は自立性を有する。

また、kamu'nna'a(食べるか)、kama'nna'a(食べないか)、kada'nna'a(食べたか)などと hanana'a とを対比することで、「na'a」を「接辞」とするのには無理があることもわかる。

9. 若干の補い

所謂「命令形」「勧誘形・意志形」については述べなかったので、ここで少々触れておく。

それぞれ「命令形」「接尾辞」としての「i ('wa)」、「勧誘形・意志形」としての「a (na)」を設定し、「接中辞」が「空」であるとすれば説明がつく(形容詞の「ku」の場合も同様)。以下のようである。

kam+i → kami (食べよ)

kam+i'wa → kami'wa → kame'e (食べよ)

'jum+i → 'jumi (読め)

'jum+i'wa → jumi'wa → jume'e (読めよ)

kak+i → kaki (書け)

kak+i'wa → kaki'wa → kake'e (書けよ)

ʔi'ig+i → ʔi'igi (泳げ)

ʔi'ig+i'wa → ʔi'igi'wa → ʔi'ige'e (泳げよ)

kam+a → kama (食べよう)

kam+ana → kamana (食べよう)

'jum+a → 'juma (読もう)

'jum+ana → 'jumana (読もう)

kak+a → kaka (書こう)

kak+ana → kakana (書こう)

ʔi'ig+a → ʔi'iga (泳ごう)

ʔi'ig+ana → ʔi'igana (泳ごう)

否定の命令つまりは禁止をどう扱うかの問題もある。

kamuna (食べるな)、'jumuna (読むな)、kakuna (書くな)、ʔi'iguna (泳ぐな)

などを否定との関係で一元的に説明しようとするれば、次の方法がある。

kam+a'N+i → kama'Ni → kamuna


'jum+a'N+i → 'juma'Ni → 'jumuna


'kak+a'N+i → kaka'Ni → kakuna

ʔi'ig+a'N+i → ʔi'iga'Ni → ʔi'iguna

のような説明が可能であれば、「禁止」の「na」を立てず、「命令」の「i」だけでよいが、強引すぎると思われるので、「禁止」の「接尾辞」「na」を設定することとする。

「仮定形」にも一言触れるべきであろう。「接頭辞」と「条件形」「接尾辞」「r_{e'e}^{a'a}」との直接結合で成立する。

ka _d ^m + r _{e'e} ^{a'a}		kama'a (食べたら)
		kame'e (食べれば)

'ju _d ^m + r _{e'e} ^{a'a}		'juma'a (読まば)
		'jume'e (読めば)

この他、「接頭辞」と直接結合する「接尾辞」として「i'iga (～に) <目的>」「i'ini (～とき) <時>」などがある。

kam+i'ga → kami'iga (食べるに)

kani'iga ʔi cu'N. (食べるに行く)

kam+i'ini → kami'ini (食べるとき)

kami'ini cikare'e. (食べるとき使え。)

00. おわりに

今回は意図的に「定義」「概念規定」の類は避けて通った(「進行」「継続」「尊敬」「可能」などという文法的命名もしなかった)。事実・現象を提示し、その捉え方に関する一つの可能性をさぐることを主眼としたからである。もちろん、理論的構築物を背景にもつべきであり、そのための作業が早急になされなければならない。他日を期す。

その代わりというわけではないが、日本語と類型上よく似ている朝鮮語に関しても「活用」を「接中辞」の交代と捉えることができることを述べて結びとしたい。たとえば、

먹다 (食べる)

먹었다 (食べた) (먹- 었- 다)

먹겠다 (食べるだろう) (먹- 겠- 다)

먹었겠다 (食べただろう) (먹- 었- 겠- 다)

먹지않다 (食べない) (먹- 지않- 다)

먹지않았다 (食べなかった) (먹- 지않- 았다)

먹지않겠다 (食べないだろう) (먹- 지않- 겠- 다)

먹지않았겠다 (食べなかつただろう) (먹- 지않- 았- 겠- 다)

のように「接頭辞 먹」(語幹)と「接尾辞 다」との間に「接中辞」「았(았) (過去)・「겠(推量)」・「지않(否定)」が挿入されている。

多少複雑な処理が必要になろうが、(現代)日本(共通)語に関しても同様の対し方ができると考える。

(注1) 二重母音、二重子音は除く。

(注2) 凹凸は逆でもよい。

(注3) kado'one'era'Nの形もある。以下、-ne'era'Nは-ne'e'Nで代表させる。

(注4) -ra'aと-re'eとがある。いま、-ra'aで代表させる。

(注5) kama'N+ru → kama'N, kado'one'e'N+ru → kado'one'e'N

(注6) kamimise'e'Nに代わるものとして²u sagamise'e'N(召しあがる)が用意されている。この項のみ kamu'Nの代わりに'jumu'N(読む)で示す。

(注7) 語法上は²u saga'ju'usimise'e'N(召しあがれる)、²u saga'ju'usimiso'ora'Nta'N(召しあがれなかった)がより適切ではある。

(注8) kamibuko'one'e'N(食べたくない)が普通とも言える。

(注9) 母音連続となる場合「j」が挿入される。

(注10) kami'ja'Nzu'N(食べそこなう), kami'ja'nda'N(食べそこなわない), kami'ja'nto'o'N(食べそこなっている), kamigurusa'N(食べにくい), kami'jaqsa'N(食べやすい), kamigisa'N(食べるそうだ)

(注11) kamute'e'N(食べるのであった), kamute'eru~(食べるはずであった~), kama'nte'e'N(食べないのであった), kamabi'ite'e'N(食べるのでした), kamasute'e'N(食べさせるのであった)

(注12) arit → aqt, arir → ar は音韻変化規則適用。

<主要参考文献>

飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編(1983)『講座方言学10 沖縄・奄美地方の方言』国書刊行会

内間直仁(1984)『琉球方言文法の研究』笠間書院

清瀬義三郎則府(1989)『日本文法新論』桜楓社

金城朝永・服部四郎(1955)「琉球語」『世界言語概説下巻』研究社

佐藤喜代治編(1971)『国語学研究事典』明治書院

鈴木重幸(1960)「首里方言のいいきりの形」『国語学』第41集

——(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房

鈴木英夫(1990)「接辞、接頭語・接尾語」『日本語学』9-10 明治書院

多和田眞一郎(1973)「沖縄本島方言の動詞」『都大論究』第11号 東京都立大学国語国文学会

——(1976)「沖縄島宜野湾市赤道方言のアクセント(名詞・動詞・形容詞)」『沖縄文化』

第46号 沖繩文化協会

- (1981) 「十九世紀沖繩語の動詞の成り立ち」『沖繩文化』第57号
- 仲宗根政善 (1987) 『琉球方言の研究』新泉社
- 中本正智 (1976) 『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- (1981) 『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社
- (1990) 『日本列島言語史の研究』大修館書店
- 野原三義 (1986) 『琉球方言助詞の研究』武蔵野書院
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』岩波書店
- ブルーム・フィールド (1974) 『言語』(三宅鴻・日野資純訳) 大修館書店 (新装版第5版)
- 松村明編 (1971) 『日本文法大辞典』明治書院
- 森岡建二 (1986) 「接辞と助辞」『日本語学』5-3 明治書院
- (1988) 『現代語研究シリーズ 第3巻 文法の記述』明治書院
- 国語学会編 (1962) 『方言学概説』武蔵野書院
- (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 国立国語研究所編 (1963) 『沖繩語辞典』大蔵省印刷局